

大学生の高校時代の学習態度に関する教育心理学的研究¹⁾

牧 野 幸 志

An analysis of university students' study-attitudes during senior high-school days in educational psychology.

Koshi Makino

Abstract

The purpose of this study was to investigate study-attitudes during the senior high-school days of recent university students in Japan. One hundred and eighty six undergraduate students (most of them freshmen) answered a questionnaire. The results are as follows: (1) 70% of the students attended school regularly, but 20% were often late for school. (2) For most students, their study-attitudes in senior high-school days were not so good. (3) They studied for about one and a half hours at home on average. (4) Senior high-school attendance was closely related to university day's attendance. Finally, the current trend of low achievement levels by university students in Japan was discussed in this paper.

Key words : university students 大学生, study-attitudes 学習態度, senior high-school days 高校時代, educational psychology 教育心理学.

問 題

現在、日本の大学生の「学力低下」, 「学習意欲の低さ」が問題となっている(井上, 1993; 豊田, 1999)。従来から、大学合格までは受験のために勉強をするが、大学入学後は、あまり勉強をせず遊びやサークル, アルバイトなどを楽しむという「大学のレジャーランド化」の問題が指摘されてきた。しかしながら、受験戦争が激しかった時代には、受験生はある程度の勉強をしなければ大学に合格することができず、入学生は比較的高い学力を持って入学してきた。したがって、入学後にあまり勉強しなかったとしても、基礎学力をもって授業を受け、卒業していったのである。ところが、1990年後半になると、少子化の影響を受け、受験戦争が緩和されてきた。このような状況では、競争倍率が下がり、合格の基準を下げざるを得ず、入学者の基礎学力は低下してしまう。実際、比較的入学基

¹⁾ 本研究の一部は、平成13年度日本私立学校振興・共済事業団補助金「教育・学習方法等の改善」の助成を受けた。

準が厳しい国立大学においても、「大学の授業についていけない」、「何がわからないのかさえも自分でわからない」学生が存在している。特に、基礎学力を必要とする理科系の学部では、その学力低下は顕著である。また、私立大学においては経営上学生の確保が必須であり、定員の充足を考慮し、合格基準を大幅に下げざるを得ないというのが現状であろう。

では、現在、大学に入学してくる学生は、高校時代にどれくらい学習していたのであろうか、あるいは、どのような授業態度、学習態度であったのであろうか。最近では、大学において学生の授業中の私語、居眠り、携帯の使用などマナーの悪さが問題となっている。このような態度は、大学に入ってから顕著になってきたものであろうか、それとも、高校時代にすでに授業態度がよくなり、そのような学生が入学するようになった結果なのであろうか。残念ながら、大学の経営者、教職員は入学してくる学生がどの程度の学力をもっているのか、高校時代の授業態度、学習態度などについてほとんど知らない。入学生の学力について知る唯一の材料は、入学試験であり、学習態度、授業態度を知る手がかりは、内申書と面接である。しかし、内申書と面接は形式を重視したものがほとんどであり、実際の学習状況がわかることはほとんどない。したがって、大学側は入学してくる学生が、高校時代にどの程度勉強していたか、どのような授業態度、学習態度を持っていたかを知らないままに授業を行なうこととなる。そのような状態で、本当に学生にあった教育の提供が可能であらうか。地方の国立大学と私立大学で大学に対する満足度を調査した牧野・森（印刷中）によると、国立大学においても40%の学生が「あまり満足していない」と答えている。満足度の中でも特に授業内容への満足度は、友人関係や資格取得への満足度、大学の物理環境への満足度よりも低いことが明らかとなっている。

高校から大学への進学は、その学習内容だけでなく生活環境、生活スタイルまでも大きく変化する時期である（南・山口，1992）。本研究では、現代の大学生が高校時代にどのような生活態度をもっていたか、また、どの程度学習を行なってきたのかを検討することを目的とする。まず、第1に、現代大学生の高校時代の生活態度、学習態度について調査を行なう。次に、高校時代に自宅でどの程度勉強していたかを調べる。最後に、高校時代の登校状況と大学での出席状況との間に関連があるかを検討する。以上のような方法で、大学への入学生の高校時代の生活態度、学習態度を調べることは、今後ますます大衆化していく大学教育において、どのような教育が必要となるかを知る糸口となるであろう。

方 法

調査実施大学と被調査者

四国地方の国立A大学の1クラスと同じく四国地方の私立B大学の1クラス、計2クラスにおいて質問紙調査を行なった。A大学は県庁所在地の中心部に位置する中規模の大学である。一方、B大学は同じ県庁所在地の郊外に立地する単科大学である。対象としたクラスはいずれも主に1, 2年生を対象とした選択科目であり、学生はいくつかの選択科目の中から授業を選ぶことができる。A大学においてはすべての学部から受講生が集まっており、B大学においても2つの学科から学生が集まっていた。2つのクラスで1年生を調査対象とした。被調査者は、大学生186名（A大学128名、B大学58名、男性113名、女性73名、平均年齢18.37歳、年齢幅18～20歳）であった。

質問紙の構成

高校時代の生活態度 松村・篠原・中西（1995）、大野（1984）を参考にして、2項目の高校時代の生活態度（登校状況と遅刻状況）を測定する項目（詳しくは後述）を独自に作成した。各項目に対して、「まったくあてはまらない」～「非常にあてはまる」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど高校にまじめに登校していたこと、遅刻しなかったことを示す。

高校時代の学習態度 松村他（1995）、大野（1984）を参考にして、7項目の高校時代の学習態度（授業中の態度と学習態度）を測定する項目（詳しくは後述）を独自に作成した。各項目に対して、「まったくあてはまらない」～「非常にあてはまる」の5段階で評定を求めた。得点が高いほど授業にまじめに参加していたこと、学習していたことを示す。その他、「大学に入ったらやりたいことがあった」かなどを聞いた。

自宅での学習時間 高校3年生1学期の自宅での学習時間を思い出してもらい、その平均学習時間を聞いた。対象時期を高校3年生1学期にした理由は、受験勉強が本格的に始まる前の自宅での学習時間を知るためである。受験時期の学習時間を尋ねた場合、受験の対象とした大学により差が見られることが予想される。その他、年齢、性別などの人口統計学的変数への回答を求めた。

手続き

調査は、対象となったクラスで授業中の約15分を利用して、「高校生活に関するアン

ケート」という形式で実施した。調査時期は、いずれのクラスでも平成13年4月であった。調査実施に際して、「他人の回答をみないこと」、「他人と話をしないこと」と強調し、個人のプライバシーに配慮した。

結 果

高校時代の登校状況

被調査者全体の高校時代の登校状況、遅刻状況に対する回答の全体の平均値と学校別の平均値をTable 1に示した。その結果、登校に関しては、比較的高い値であった。学校別にみても、A大学の学生の方がその値が高い。全体で回答者の割合をみると、「学校には、まじめに登校していた」という質問に対して、66.7%の学生が「非常にあてはまる」と答えている。遅刻に関しては、平均値は比較的低い値であった。回答の割合をみると、「学校に遅刻していた」という質問に対して、46.8%の学生が「まったくあてはまらない」、24.7%の学生が「あまりあてはまらない」と答えている一方で、「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」に該当する学生を合わせると23.7%であった。

Table 1 高校時代の生活態度と学習態度

	全体 N=186	国立A大学 N=128		私立B大学 N=58
1. 学校には、まじめに登校していた。	4.35	4.56	>	4.14
2. 学校に遅刻していた。*	3.81	4.00		3.62
3. 授業中、私語をしなかった。	3.15	3.55	>	2.74
4. 授業中、居眠りをしなかった。	2.85	2.88		2.81
5. きちんとノートを取っていた。	3.86	4.11	>	3.61
6. 授業に意欲的に取り組んでいた。	3.26	3.43	>	3.09
7. 授業中は集中して先生の話聞いていた。	3.18	3.45	>	2.91
8. 授業内容は、よく理解していた。	3.18	3.60	>	2.76
9. 試験勉強をしっかりとしていた。	3.25	3.50	>	3.00
10. わからないことは、先生に質問した。	3.00	3.17		2.83
11. 高校時代に打ち込んだものがあった。	3.61	3.47		3.74
12. 勉強するのが好きな科目があった。	4.07	4.23		3.90
13. 楽しい授業があった。	4.15	4.23		4.07
14. 大学に入ったらやりたいことがあった。	3.79	4.14	>	3.43

* 逆転項目

表内の数値は、平均値を示す（1～5）。

注）不等号は、平均値間のその方向に有意差があることを示す（ t 検定、 $p<.05$ ）。

高校時代の学習態度

被調査者の高校時代の学習態度に対する回答の全体の平均値と学校別の平均値をTable 1に示した。全体をみてみると、「私語をしなかった」、「居眠りをしなかった」など授業中の態度は比較的低い値であった。また、学習に関しても「意欲的に取り組んだ」、「集中して先生の話を書いた」などに対する態度も低い値であった。学校別にみると、授業中の態度と学習態度のいずれにおいても、A大学の学生の方がB大学の学生よりも平均点が高かった。特に、「授業内容は、よく理解していた」の項目においては平均値に大きな差がみられた。

また、「大学に入ってからやりたいことがあった」の質問に対する回答の平均値は3.79に留まった。回答の中身をみてみると、「非常にあてはまる」と回答した学生は39.8%であった。しかしながら、学校によりその割合の差が大きく、A大学の学生では49.2%が「非常にあてはまる」と回答しているのに対して、B大学の学生は19.0%であった。A大学の学生の方が大学に入ってから目標を持っていたことがわかる。

高校時代の自宅での学習時間

高校3年生1学期の自宅での学習時間に関して回答を求めた。その結果、平均学習時間は94分（1時間30分強）であった。しかしながら、分散が大きかったため、学習時間を0

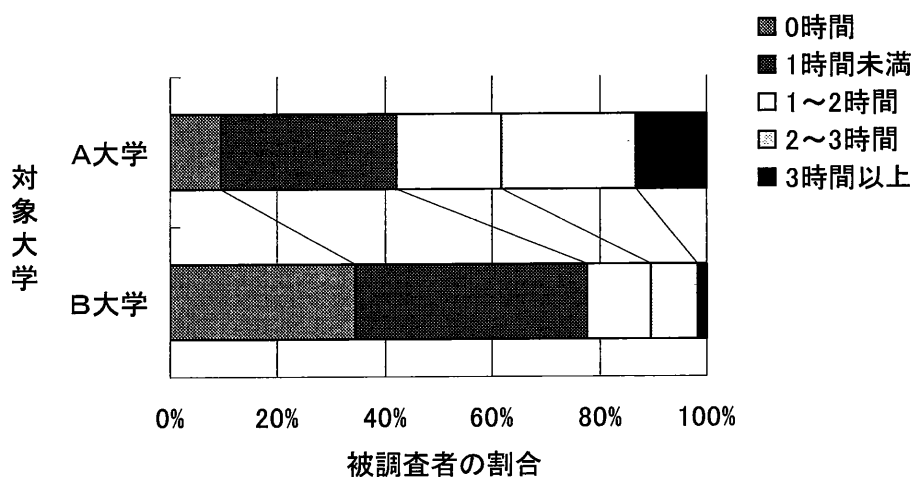


Figure 1. 高校時代の学習時間（3年生1学期・自宅）

時間、1時間未満、1～2時間未満、2～3時間未満、3時間以上のカテゴリーに分け、学校別に分類をおこなった。その結果がFigure 1である。A大学においては、カテゴリーの割合はそれぞれ、9.4%、32.8%、19.5%、25.0%、13.3%であった。1時間未満という学生が最も多かったが、1時間以上自宅で勉強している学生も60%近くいた。一方、B大学におけるカテゴリーの割合はそれぞれ、34.5%、43.1%、12.1%、8.6%、1.7%であった。こちらにおいても1時間未満という学生が最も多かった。しかしながら、B大学の特徴として、自宅での学習時間が0時間、つまり家では全く勉強していなかったという学生が3割存在した。また、自宅で1時間以上勉強していた学生の割合も2割に留まった。

高校での登校状況と大学での出席状況との関連

高校時代の登校状況と大学での授業への出席との間に関連があるかを検討した。この分析は、大学での出席状況が把握できるB大学の学生を対象に行なった。対象となった授業は、本調査を行なった授業で、1年次前期開講であった。カイ二乗検定を行なう前に、高校時代の登校状況と大学での出席状況を分類した。まず、高校時代の登校状況は、「学校には、まじめに登校していた」という質問に対して、「非常にあてはまる」と答えた学生を「非常にまじめ」に登校した群に、それ以外の回答をした学生を「あまりまじめでない」群に分類した。次に、大学での授業への出席状況は、受講を続け最終回に行なわれた試験を受けた学生、つまり、授業を欠席したことはあるかもしれないが単位習得の見込みがある学生を「最終試験受験」群とし、途中で受講を辞退し、試験を受けに来なかった学生、つまり、欠席が多すぎたため、あるいは、試験を受けなかったために単位を習得する

Table 2 高校での登校状況と大学での出席との関連

高校での登校状況	大学の授業への出席状況	
	最終試験受験 ¹⁾	ドロップアウト ²⁾
非常にまじめ	18	12
あまりまじめでない	8	20

表内の数値は度数を示す。

注1) 受講を続け、最終日に行なわれた試験を受けたことを意味する。

2) 最終日の試験を受けなかったか、それ以前に受講をやめたことを意味する。

ことができなかった学生を「ドロップアウト」群とした。したがって、B大学の学生は、2（高校時代の登校状況）×2（大学での出席状況）の4つの条件に分類されたこととなる。

分析に際して、「高校での登校状況と大学での出席には関連性がない」という帰無仮説を立てた。カイ二乗検定の結果、5%の有意水準で帰無仮説は棄却された（ $X^2=5.19$, $df=1$, $p<.05$ ）。したがって、高校での登校状況と大学での出席には関連性があるという結論が得られた（Table 2 参照）。詳しく見てみると、高校時代にまじめに登校している学生に関しては、大学の授業への出席に差はみられないが、高校時代の登校状況があまりよくない学生は、大学での授業に関しても出席が少なく、途中で来なくなる割合が高い。

考 察

本研究の目的は、現代の大学が高校時代にどのような生活態度、学習態度をもっていたかを把握することを第1の目的とした。また、高校時代にどの程度自宅で学習をしていたかを知ることを第2の目的とした。さらに、高校時代の登校状況と大学での出席状況との間に関連があるかを検討することが第3の目的であった。

まず、高校への登校状況について、対象となった学生は比較的まじめに登校していたことがわかる。しかしながら、結果をその割合でみると、約7割の学生が非常にまじめに登校している一方で、3割の学生が高校時代に何らかの理由でまじめに登校していなかったことがわかる。また、2割強の学生が、高校時代に「遅刻をしていた」と回答しており、大学生に目立つ遅刻に関してもすでに高校時代からその兆候がみられているといえよう。

次に、高校時代の学習態度について述べる。高校時代の授業態度は、比較的よくないという結果が得られた。具体的には、授業中に私語をしていたり、居眠りをしていた学生が多かった。また、学習態度についても、授業中に集中して聞いていたり、意欲的に勉強する傾向はあまりみられなかった。しかしながら、これらの結果は、調査対象となった大学によって差がみられた。国立のA大学の学生は私立B大学の学生と比べ、授業態度も学習態度も比較的良く、特に学習の理解度が高かった。このことから、地方の国立大学と私立大学においても、入学してくる学生の元々の授業態度、学習態度にも違いあることがわかり、入学してくる学生に合った授業形態、教授法が必要であろう。また、「大学に入ったらやりたいことがあった」という質問に対して、国立A大学においては、およそ半分の学

生が「非常にあてはまる」と答えているのに対して、私立B大学においては2割に留まった。学生が大学進学に関して目的をもっていないことは、昔から指摘されてきたが、学問、部活、遊びにかかわらず、大学に入って特にやりたいことがないという学生が非常に多いことは注目すべき点であろう。

さらに、高校3年1学期の自宅での学習時間を尋ねた結果、いずれの大学においても1時間未満という学生が多く、比較的短いことが明らかとなった。本格的な受験シーズンを迎える前の時点での学習時間であるので、一概にはいえないが、大学進学と入学後の学習を考えると少ないように考えられる。また、学習時間にも大学間で差がみられた。国立のA大学では、1日1時間以上勉強していた学生も6割いた。その中に、2時間以上という学生も4割含まれていた。他方、B大学においては、1時間未満の学生が4割いるものの家では全く勉強しなかったという学生が3割強みられた。このことから、地方の国立と私立においても、学生の能力はもちろんのこと、高校時代の学習量にもかなりの格差があることが明らかである。したがって、教える側も学生の能力、基礎学力に合わせた授業が必要となるだろう。

高校時代の学校への登校の状況と大学での授業への出席状況との関連性を検討した。その結果、両者の間に密接な関連性がみられた。具体的には、高校時代にまじめに登校している学生に関しては、大学に入ってからまじめに出席をしている学生と1年次前期にもかかわらず出席しなくなる学生がみられた。これは、担任教師がおり、毎日出欠を取る高校と違い、基本的には授業への参加は本人の自由意志による大学では、高校時代にはあった義務感による登校、あるいは出席がなくなったためと考えられる。高校時代に、仕方なくまじめに学校に通っていた学生の中には、大学に入ってから授業に出席しなくなる学生もみられる。また、進学と同時にひとり暮らしを始めた学生は、生活環境の変化により出席が少なくなる傾向があるだろう。一方、高校時代にあまりまじめに登校していない学生は、大学に入ってから授業にあまり出席しない傾向がみられた。これは、すでに高校時代より学校への登校に消極的だった学生にとって、出席の拘束がほとんどない大学の授業が、その欠席、あるいは、不登校を助長した結果といえよう。つまり、高校へあまりまじめに登校していなかった学生は、大学入学後も授業に出席しない傾向がある。このことは、学生を受け入れる大学側として考慮すべき問題である。なぜなら、教育機関として大学が生き残ろうとするとき、学生の指導が最優先なるからである。学生を指導する際には、まず、学校に来てもらう必要がある。つまり、学校に来てもらって初めて指導することが

できるのである。学生が大学に積極的に来るようになるためには、特色のある授業の開講、よりよい授業のための改善などが必要である。大学に対する満足度は、主に授業への満足度により決定されることが指摘されている（牧野他、印刷中）。

最後に、本研究の今後の課題として、以下の点があげられる。まず、調査対象大学の拡大である。本研究では、地方都市の国立大学と私立大学を対象とした。ところが、入学がより困難といわれる国立、私立大学、あるいは都市部の大学などが存在する。また、高校での教育方針などは、地域差がみられる。今回は四国地方で調査を行なったが、首都圏などの都市部では、高校生の学習態度なども異なるかもしれない。したがって、より多くの、そして、多種多様な大学を対象として、調査を行なう必要がある。次に、高校時代の学習と大学における学習との縦断的研究が必要である。現在、大学では、学生の「基礎学力のなさ」が指摘されている。しかしながら、高校時代に学んだ知識が本当に大学に必要なものであるのか、あるいは、役立っているのかには疑問が残る。したがって、高校時代の学習と大学での学習との関連性の検討が不可欠である。大学においてどのような知識が必要となるのか、どのような能力を身につけるべきなのかを知り、そのためには高校でどのようなことを学んでおくべきかを探る必要があるだろう。

引用文献

- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察—大学の授業評価に関する実証的研究(8)—
福岡教育大学紀要, 42, 277—291.
- 牧野幸志・森裕紀子 印刷中 大学生活に対する満足度に関する教育心理学的研究—学生は大学に満足しているのか?— 高松大学紀要, 37.
- 松村孝雄・篠原 豪・中西和歌子 1995 大学時代と高校時代のライフスタイルの比較—学生生活へのコミットメント程度に関して— 東海大学紀要教育研究所, 3, 49—67.
- 南 博文・山口修司 1992 大学生活への移行 山本多喜司・S.ワップナー (編) 人生移行の発達心理学 Pp.179—204.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一考察—現代日本青年の心情モデルについての検討—
教育心理学研究, 32, 100—109.
- 豊田秀樹 1999 学力崩壊 P H P 研究所